

# 巖島管絃祭の期日に関する陰陽五行思想からの考察

## An Examination concerning the Date for Kangensai (a Wind and Stringed Instruments Festival) at Itsukushima Shinto Shrine

— Analysis from Yin and Yang and the Five Elements of Thought —

曾 我 とも子  
SOGA, Tomoko

### I. はじめに

巖島神社は広島県廿日市市宮島町の海上に造営された珍しい神社である。巖島神社の起源は、推古元(593)年に遡る。創建当時、社殿はなく仁安3(1168)年に平清盛と巖島神社神主佐伯景弘により現在における大規模な社殿となったとされる<sup>1)</sup>。

巖島神社は、巖島(宮島)西北の北東と南西から突き出た尾根の間の入江に鎮座している。その理由は島自体が神として崇められ信仰の対象となっていたことから、島の上に造営できなかったためとされる。そして巖島神社には、巖島の中心となる神の山と崇められてきた弥山を源流とする御手洗川と白糸川の両河川が流れ込んでいる。「巖島神社本殿の裏の森を「後苑」といい、神聖な場所として人の出入りを禁じている。そこにある不明門は絶対に開いてはならないとされていた。この構造は祭神が紅葉谷(御手洗川)を通路とし、弥山から本殿へ出現されるという信仰に裏付けられている。不明門は神の通られる門であって人は出入りしてはならないのである。」<sup>2)</sup>(図1)

巖島神社は内宮と外宮の2つの宮からなる神社である。内宮は巖島神社であり、外宮は対岸にある地御前神社である<sup>3)</sup>。そして弥山頂上近くにある御山神社が奥宮となっている<sup>4)</sup>。

この弥山頂上から巖島神社—地御前神社までは、南北一直線に延びている(図2)。さらに巖島神社本殿は東南を座(背)に北西に向いており、鳥居もその位置に置かれている。鳥居には陰陽二元論の太陽(陽・東側)と月(陰・西側)が描かれており、御山神社、巖島神社、地御前神社ともに祭神は、水の神であり、航海の神としても崇められている市杵島姫命を中心とした田心姫命・湍津姫命の三女神である。

そして巖島神社において、最も盛大な祭りのひとつが、この三女神を慰めるために旧暦6月17日の夕刻から深夜にかけて船上にて管絃を奏する神事、管絃祭である。「この祭は、奈良時代から平安時代にかけて京の都で盛行した管絃の遊びを平清盛が難波の四天王寺から巖島に持ち込んだものとされ、都では苑池や河川で行っていたものを巖島では海上で行い、遊宴のためでなく御神慮を慰撫することが目的とされた。」<sup>5)</sup> 旧暦6月に行う理由として定説となっているのが、「吃水の深い大船を使用しなければならぬから、潮位が高いのは絶対条件である。陰暦7、8月から9月頃に潮位は高くなる

が、台風襲来のおそれがあるために、そこを避けると6月になる。」<sup>6)</sup> というもので、今日までその定説が踏襲されている<sup>7)</sup>。

しかし、旧暦6月という時期は単に船の吃水から定められたのであろうか。筆者は旧暦6月17日には神事として、より重要な意味があると考えた。そこで、本研究では、厳島管絃祭の期日のもつ意味を陰陽五行思想から分析して明らかにすることを目的としている。その際、筆者が陰陽五行思想を取り上げる理由は、厳島神社を大規模な神社とした平清盛の時代には都市計画や宮殿、神社の造営等に風水思想による立地および陰陽五行思想による呪術が大きな影響をもっていたからである。筆者は既に、この思想を用いて、福原における安德帝の内裏の位置の特定や、清盛本邸の特定に成果を上げている(曾我、2010、2011)。<sup>8)</sup>

平清盛と厳島神社に陰陽五行思想が深くかかわっていた証の1つを以下に述べる。

厳島神社は世界遺産になるほどの有名な神社ではあるが、造営当初(平安時代後期)を記録する史料が殆ど残されていない。その数少ない史料のひとつ『高倉院厳島御幸記』に、高倉上皇の厳島御幸の際に陰陽師が同行し、厳島神社において陰陽師のための座を設けていることが記されている。このことから厳島神社には、陰陽師が関わっていることがわかる<sup>9)</sup>。陰陽師とは、平安時代中期頃より盛んとなった陰陽道を司る陰陽家である。「陰陽道とは、6世紀頃に中国から日本に伝えられた陰陽五行思想に起源をもつ。陰陽五行説とは、自然界・人間界のあらゆる現象とその変遷を陰・陽の2気の消長変化、あるいは木・火・土・金・水の5行の循環によって説明する古代中国で成立した自然哲学であり、あらゆる中国文化の基底をなすものであった。特に推古天皇10(602)年の百済僧観勒が暦・天文・地理・遁甲・方術とんこうの書を日本にもたらしたことが大きな契機となった。」<sup>10)</sup>

このように管絃祭が、単なる風流な遊びとしてではなく、厳島の神を慰める祭祀として行われ、そして陰陽師が関わっていた。そこには、潮の満ち引きや台風の到来を避けるためだけではない重要な意味が隠されていると考える。なお、筆者のこの仮説に答える資史料や論文は、管見の知る限りではないと思われる。

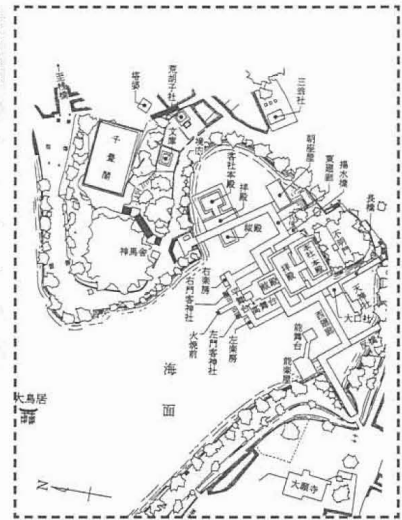
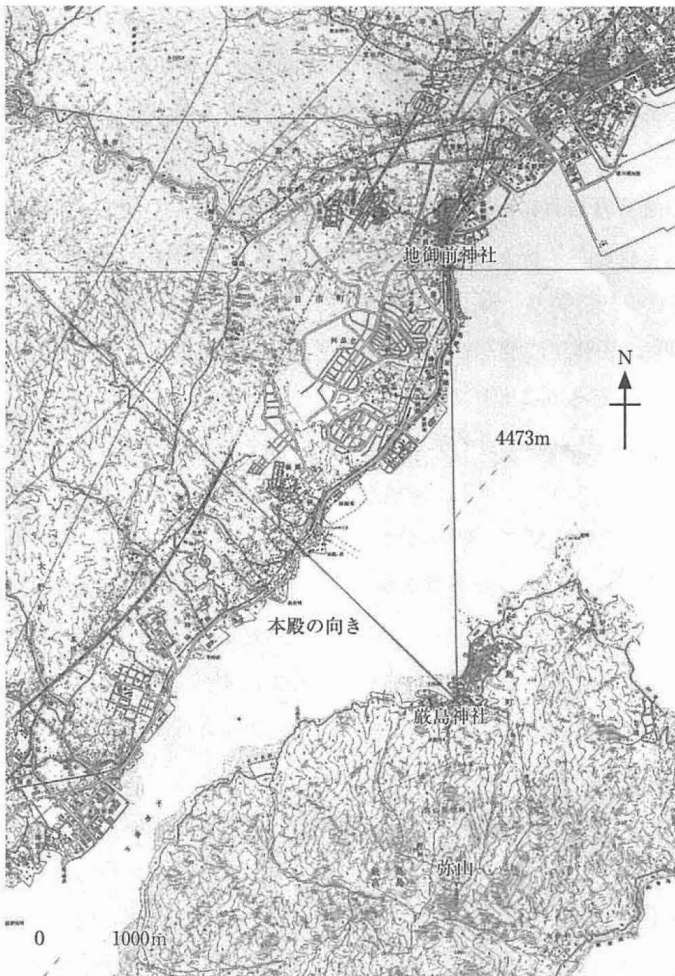


図1 『巖島信仰事典』より転載

図2 巖島地図 (国土地理院25000分の1地図より作成)

弥山—巖島神社—地御前神社は南北に並び、巖島神社本殿は西北(乾)に向いている。

## II. 神社の配置と星・月の位置

前述したように、霊峰弥山—巖島神社—対岸の地御前神社は、南北に並んでいる。これは市杵島姫命が航海の神として崇められることから、海での渡航の目印となった北極星と北斗七星の位置に関係すると思われる。北極星は北に不動の位置を占めており、天の皇帝とされ崇められた星である。北斗七星は季節や時刻によって、その位置が変わる。また天帝の乗り物とも言われた星である。この両星は、1年を通して夜空に見ることができるため南北の位置が確認でき、南北が判れば東西も知ることができる、方向を知るための重要な星である<sup>11)</sup>。さらに、巖島神社の本殿は、乾(北西)の方角に向いている。これは地形を重視したためとも考えられるが、北斗七星・南斗六星、さらに月の配置を考慮したことにあると考える。鎌倉時代後期に、後深草院二条によって書かれた紀行日記『とはずがたり』巻5には、二条が乾元元(1302)年9月13日に巖島で行われた秋の例祭へ詣でた様子が書かれている。

「十三夜の月が御殿の後ろの深山から出る様子は神の御前の所からお出ましになるのに似ている。御殿の下まで潮がさし上がって、空に澄んで見える月がまた水の底にもあるのかと疑われる。」<sup>12)</sup> 法会の終えた後に十三夜の丸い月が本殿後ろから現れる様子を描写しており、本殿が西北に向く厳島神社ならではの光景である。

厳島神社の重要な祭祀のひとつに旧暦6月17日に行われる管絃祭がある。『厳島誌』<sup>13)</sup>には「管絃祭は、和船三隻を並べ連ねて、屋形を設け、午後五時、本社より神輿を移し、神職伶人倍乗して、廊嘴より漕ぎ出で、8時、対岸の地御前神社に到り、海上にて神事を行い9時、長濱に還り神事あり、9時半、大元の海上にて神事あり、10時、客神社に至りて神事あり、尋いで廊嘴に還り、神事を終へて、神輿を本社に納む、すべて神事毎に奏楽あるによりて管絃の名あり。」とある。この祭りで注目すべきところは日没後に外宮である地御前神社前の浜辺で神事と管絃が開始される時刻（20時）と厳島神社に帰着し、祭事が終了する頃の時刻（23時）である。北極星は1年中北に見えるが、北斗七星は季節によりその位置が移動するため冬の間は北東に、夏の間は北西に位置している。南斗六星は夏から秋にかけてみえる星で、冬の間は地平線下にいるため見えない。旧暦6月～8月の日没後には、北斗七星は北西方向、南斗六星が南東方向に見える。いわゆる管絃祭の行われる夏には、厳島神社本殿の前方上空に北斗七星、後方には南斗六星が輝いているのである。そして、すべての神事の終る23時頃には、社殿背後（南東）から十七夜月が顔を出し、月にその位置を譲った南斗六星は南に移動する（図3）。この情景が管絃祭を彩るひとつの演出を担っている。

表1は1180年と2010年の旧暦各月17日の星座の様子を表したものである。800年以上の隔たりがあっても北斗七星と南斗六星の位置は殆ど変わらない。この表を見て判ることは、日没後に北斗七星と南斗六星両方の全姿がみえるのが、旧暦6月～9月であり、厳島神社本殿が向いている前方（西北）に北斗七星、社殿後方（南東）に南斗六星がくるのが旧暦6月である。西北は八卦の「乾」にあたり「乾」は「陽」の気の集まった最も純粋な「陽」である。ために西北は万物を生み出す光の元でもある天（☰）を象徴する方角とされており<sup>14)</sup>、北斗七星の柄（剣先）は十二支の未を指している。未は、月では6月<sup>15)</sup>であり八卦では坤（地）を表す。未とは万物が実り豊かに滋味をもたらすさまをいう。「坤（☷）が西南に位置するのは、坤の卦が陰気だけで、かたどられているからで、万物を良く養うのに、土地よりすぐれたものはない。陰の本質は位が低く従順で、みだりに先立つことはない。陰気は午から動き出し、未に至って、はじめて出現する。だから、坤は午の位置より後ろにある。地の本質は陰が積み上げられていて、坤はもはや陰のみであるので、地を象徴している。」<sup>16)</sup>

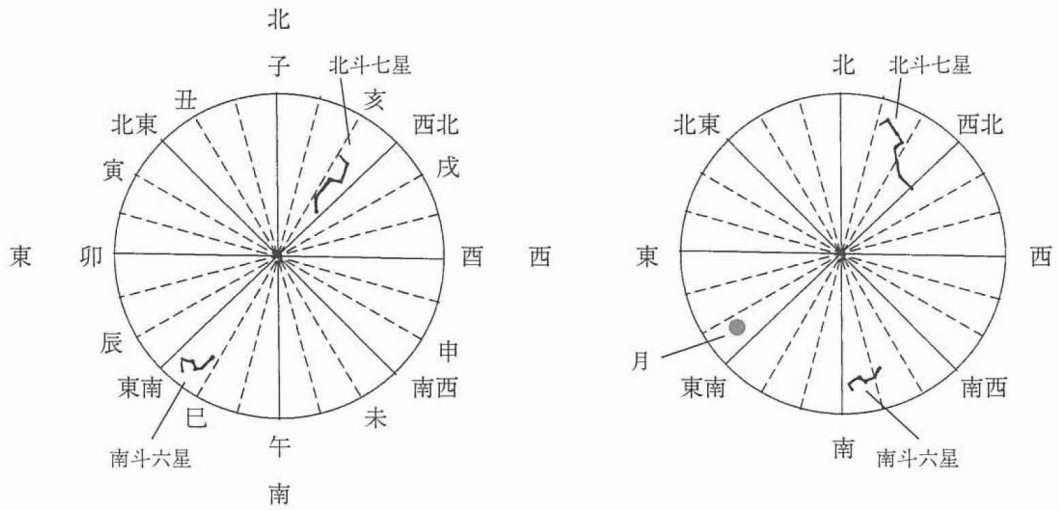


図3 天文ソフトStella Theater Proを基に作成  
 旧暦6月17日の北斗七星・南斗六星・月の位置  
 ・日没後の20:00、北斗七星は西北に位置し、その柄は未に向いている。(左)  
 ・すべての祭事終了後の23:00、十七夜月が東南に顔を見せる。(右)

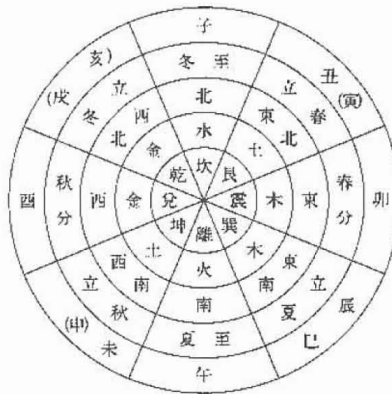


図4 『五行大義下』より転載  
 坤は、五行では土(地)であり、方位は西南、  
 季節は立秋、十二支では未である。

表 1

1180（治承4）年 日没後（19：30～20：00）の北斗七星・南斗六星・月

旧暦	*現在暦	北斗七星	南斗六星	月
1/17	2/21	北東	見えない	東
2/17	3/21	北東	見えない	東
3/17	4/20	北東	見えない	見えない
4/17	5/20	北	見えない	見えない
5/17	6/18	西北	東南に柄の一部	見えない
6/17	7/18	西北	東南	見えない
7/17	8/16	西北	南	見えない
8/17	9/15	西北西	南南西	見えない
9/17	10/14	西北西	南西	東
10/17	11/13	北	見えない	東
11/17	12/12	北	見えない	東
12/17	1181.1/11	北北東	見えない	東

1180（治承4）年23：00の北斗七星・南斗六星・月

旧暦	*現在暦	北斗七星	南斗六星	月
1/17	2/21	北東	見えない	東南
2/17	3/21	北北東	見えない	東南
3/17	4/20	北	見えない	東南
4/17	5/20	西北	東南	東南
5/17	6/18	西北	南南東	東南
6/17	7/18	西北	南	東南
7/17	8/16	西北西	南西	東南
8/17	9/15	西北西	南西に柄の一部分	東南
9/17	10/14	北	見えない	東東南
10/17	11/13	北北東	見えない	東
11/17	12/12	北東	見えない	東
12/17	1181.1/11	北東	見えない	東

天文ソフト Stella Theater Pro を基に作成

2010年における旧暦17日、日没後（19：30～20：00）の北斗七星・南斗六星・月

旧暦	*現在暦	北斗七星	南斗六星	月
1/17	3/2	北東	見えない	見えない
2/17	4/1	北東	見えない	見えない
3/17	4/30	北東	見えない	見えない
4/17	5/30	北	見えない	見えない
5/17	6/28	西北	東南に柄の一部	見えない
6/17	7/28	西北	南東	見えない
7/17	8/26	西北	南	東
8/17	9/24	西北西	南南西	東
9/17	10/24	西北西	南西	東
10/17	11/22	北に一部	見えない	東
11/17	12/22	北に柄の一部	見えない	東
12/17	2011年 1/20	北北東	見えない	東

## 2010年における旧暦17日、23時の北斗七星・南斗六星・月

旧暦	*現在暦	北斗七星	南斗六星	月
1/17	3/2	北東	見えない	東南
2/17	4/1	北北東	見えない	東南
3/17	4/30	北	見えない	東南
4/17	5/30	西北	東南	東南
5/17	6/28	西北	東南に柄の一部	東南
6/17	7/28	西北	南	東南
7/17	8/26	西北西	南西	東南
8/17	9/24	西北西	南西	東南
9/17	10/24	北に柄の一部	見えない	東
10/17	11/22	北北東	見えない	東
11/17	12/22	北東	見えない	東
12/17	2011年1/20	北東	見えない	東東南

天文ソフト Stella Theater Pro を基に作成

\*現在の西暦はグレゴリオ暦であるため旧暦をそのまま当てはめても当時の月日にはならない。

よって、旧暦をグレゴリオ暦に修整した月日で表示している。

### Ⅲ. 平安時代における北斗七星と南斗六星の意味

平安時代の人々にとって、北斗七星と南斗六星はどのように受け止められていたのだろうか。陰陽道の教本ともなった中国の古典書『史記』や『五行大義』には以下のように記されている。「北斗とは天の中心にあり、地上の崑崙山に相当する。運行してその柄の示すところは二十四節気に従って、時刻を定め、十二か月を定める。また、州国・分野（星宿）・寿命も北斗七星に導かれる。だから七政とする。『虞録』に“北斗七星は璇・璣・玉衡によって七政をとり行っている。政とは天子が天下を治めることである。だから王者は、天の運行の影響を受けて、政治を行っている。北斗には七星があり、天子には七政がある。”と。その七星にはそれぞれ四つの名前がある。『(春秋) 合誠図』に次のように述べている“北斗の第一星を樞といい、二星を璇といい、三星を璣といい、四星を権といい、五星を衡といい、六星を開陽といい、七星を標光という。”と。」<sup>17)</sup>「北斗の七星は、いわゆる璇璣玉衡（北斗七星）の運行を観測して日月五星の運動を正すと言われている星である。七星の中第五から第七の杓の部分は竜角につながり、第五の衡星は南斗に対応し、第一から第四までの魁の部分は参<sup>18)</sup>の先端に対してしている。……また斗（北斗七星）は天帝の乗車で、天の中央をめぐり、四方を統一し、陰陽の区別を立て、四季を分け、五行の活動をなめらかにし、二十四節気を動かす。これらのことはみな斗の役目である。」<sup>19)</sup>

中国で8世紀後半に密教と道教信仰とが融合して道教で司命神とされた北極星・北斗七星、冥官神の泰山府君などの信仰を取り入れた多数の道密混淆経典が作られ、その多くが正統な密教経典とともに9世紀の入唐僧によって日本に伝えられた。陰陽師は9世紀後半から属星祭や本命祭を行いはじめ10世紀に入ると密教でも尊星王法・北斗法・本命元供を行うなど星宿法が盛んになる<sup>20)</sup>。また「北斗七星は一昼夜に、また十二ヶ月に剣先は十二支の方角を指すので、剣先星または破軍星と呼ばれた。

陰陽道ではその先に金神が位すると見て、その方角に向いて戦えば必ず敗れ、また公事や勝負事に不利であるとした。しかし、それ以上に破軍星は、海上で方角見に用いるたいせつな星で、これを「破軍を繰る」と言った。北斗七星の周極運動で斗柄が十二支の方角を指すことは、海上生活の方角見にたいせつな知識になっていた。<sup>21)</sup>そして北斗七星と対となって見られていたのが、南斗六星である。『史記』「天官書」には、「南斗は天子の廟である。」とある。南斗六星は中国名を南斗といい二十八宿の斗にあたる。二十八宿とは、「天球上に天体の位置を示すために考えられた中国独自の赤道座標に、正しく季節を知るために暦をつくる技術の一端として、最も目立つ天体である月の運行を調べるために、天の赤道付近に見える28個の星を選び、これを原点とし天を28区画したものである。また、太陽の場合は二十八宿から別に作った十二次（赤道を12に等分割する）という方法を考案した。この12という数は、1年は12回満月を繰り返す（正しくは12ヶ月と11日）ということからきたものである。」<sup>22)</sup>

管絃祭の行われる6月は十二支では未であり、北斗七星の柄は未を向いている。6月の北斗七星の位置する乾は、八卦では天を表し、陰陽論では陽である。未は地（坤）を表し、陰である。そして天と地の間には宇宙を支配する元となる道<sup>どう</sup>がある<sup>23)</sup>。いわゆる旧暦6月は天の陽と地の陰が顔を合わせる月である。

なぜこのときに管絃を奏するのだろうか。それには、管絃とは何かを知る必要がある。

#### IV. 管絃と星信仰との関係

巖島の管絃は、<sup>ががく</sup>雅楽と呼ばれる伝統的な古典音楽である。「雅楽とは、<sup>かぐらうた</sup>神楽歌、<sup>くめまい</sup>久米舞、<sup>あづまあそび</sup>東遊など日本固有の歌曲歌舞と、七世紀の頃日本に伝来した大唐（現中国）、高麗（現韓国）などの「鼓笛之楽」を採用してその楽器編成を改め、整備完成した管絃舞曲（器楽曲）の総称で、文武天皇御宇大宝元年（701）<sup>ちぶしょう</sup>治部省の内に「<sup>うたまいのつかさ</sup>雅楽寮」（現宮内庁楽部の創始）が置かれ、雅曲正舞の教習保存が始められてより1200余年を経た今日まで確固とその伝統を継承している世にも稀なわが国の古典音楽である。」<sup>24)</sup>「外来のものは<sup>とうがく</sup>唐楽系（中国、天竺（インド）、<sup>りんゆう</sup>林邑（南ベトナム））と、<sup>こまがく</sup>高麗楽系（朝鮮、渤海（満州、現中国の東北地方））があるが、唐楽は管絃の合奏曲と舞楽の伴奏曲とがあり、高麗楽は音楽だけを単独で演奏することなく、すべて舞楽の伴奏曲である。」<sup>25)</sup>また「大陸伝来ではなく、日本固有のものとして扱われているものは、神楽、東遊、倭歌、大歌、大直日歌、田歌、久米舞の7種目である。」<sup>26)</sup>よって、巖島管絃祭で奏されるものはすべて唐楽である。しかし、その中で「催馬楽・伊勢の海」は日本古来の曲にアレンジされ、『梁塵秘抄口伝集』では催馬楽に関し天地を動かし、荒れる神をなごめ、国を治め民を慈しむ手だてであると言っている<sup>27)</sup>。「雅楽寮は、村上天皇の天暦20（948）年ごろには<sup>がくせ</sup>楽所といわれるようになった。京都御所に仕える京方の楽所のほかに奈良の春日大社、興福寺などに属した南都楽所、大阪の四天王寺に奉仕した天王寺楽所とこの3つの楽所を総称して三方楽所という名称が生まれた。平清盛は大阪の四天王寺の楽人を巖島に移し、京の栄華をそのま



まここに再現させた。四天王寺は593年に聖徳太子が建立したもので、仏を供養するにはいろいろの蕃樂ばんがくを奏するのが最もよし、樂所を作り、樂人を世襲の家業として、租税を免除するなど優遇して奨励した。」<sup>28)</sup>「雅樂では同じ音かんの甲音と乙音（1オクターブ低い音）との間を十二の半音の間隔で区切って12の音を作っている。これを十二律という。中国では周時代（紀元前1000）に、もうすでにこの十二律があった。唐の音楽がわが国に輸入されたときに、この中国の十二律も伝えられて、奈良時代から平安時代のはじめころまでは、中国の十二律がそのまま用いられていたが、のちには日本でもわが国独自の音名で十二律を表すようになった。中国ではこの基礎の音となる黄鐘の音を、長さ9寸（27.27センチ）直径3分3厘8毛（1.02センチ）の竹の管を底のほうを閉じて、吹いて得たものとし、次にこの長さの3分の1をとり去った長さである6寸（18.18センチ）を林鐘、次にこの長さの3分の1を加えた8寸（24.24センチ）を大蕤とするように、9寸を基準にして3分の1をとり去り、これに3分の1を加え、さらに3分の1を去り順にくり返して12の音を決めた。」<sup>29)</sup>

「唐樂の演奏を管絃、または管絃合奏という。同じ唐樂の曲でも舞樂の伴奏の演奏は絃樂器が入らないので管絃とはいわない。また高麗樂の合奏も絃樂器は入らないし、もともと舞樂の伴奏曲なので管絃ではない。唐樂を演奏するときの管樂器を総称して三管さんかん（笙しょう、篳篥ひちりき、笛ふえ）というが、一部分を除いて、殆どすべて竹製である。笙は、唐樂の合奏や催馬樂、朗詠の演奏には欠くことのできない樂器の花形である。中国の唐の時代に日本に伝えられて、天平勝宝8（756）年以来、正倉院に収められている笙は、17本の管で、現在使用しているものと同じである。笙は鳳笙ほうしょうということもあるが、これは竹の管の節をよくそろえて並べて作った笙の形が、中国の想像上のめでたい靈鳥である鳳凰ほうおうが翼を立てて休んでいる姿によく似ているという理由からである。絃樂器を総称して兩絃りょうげん（琵琶びわ、箏こと）と言い、箏は木でできているが竹へんなのは、この樂器が中国ではじめてできたときには竹だったという説による。打樂器には太鼓たいこ、鞆鼓かづこ、羯鼓いっこ、三鼓さんのかづみ、鉦鼓しょうこがあるが、唐樂の演奏では、3種類の打樂器を用い、それを総称して三鼓さんこ（太鼓、鞆鼓（羯鼓）、鉦鼓）という。」<sup>30)</sup> 本来、管絃合奏の絃樂器は二絃であるが、巖島の絃樂器は、「兩絃に和琴わごんが加わり三絃<sup>31)</sup>」である。よって、三管・三絃・三鼓で合奏される。

表2 十二律

応鐘 <small>おうしやう</small>	無射 <small>むえき</small>	南呂 <small>なんりよ</small>	夷則 <small>いそく</small>	林鐘 <small>りんしやう</small>	蕤賓 <small>ずいひん</small>	仲呂 <small>ちゆうりよ</small>	姑洗 <small>こせん</small>	夾鐘 <small>きやうしやう</small>	大族 <small>たいそく</small>	大呂 <small>たいりよ</small>	黄鐘 <small>かうしやう</small>	十二律 (中国)
上無 <small>かみむ</small>	神仙 <small>しんせん</small>	盤渉 <small>ばんしやく</small>	鸞鏡 <small>らんけい</small>	黄鐘 <small>おうしやう</small>	鳧鐘 <small>ふしやう</small>	双調 <small>そうじやう</small>	下無 <small>しもむ</small>	勝絶 <small>しょうぜつ</small>	平調 <small>ひやうじやう</small>	断金 <small>だんきん</small>	杳越 <small>いちょうこつ</small>	十二律 (日本)
十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	一月	十二月	十一月	月
亥	戌	酉	申	未	午	巳	辰	卯	寅	丑	子	十二支
变宮 <small>へんきゆう</small>		羽 <small>う</small>		徵 <small>ち</small>	变徵 <small>へんち</small>		角 <small>かく</small>		商 <small>しやう</small>		宮 <small>きゆう</small>	五音七声 (中国)
嬰羽 <small>えいう</small>		羽 <small>う</small>		徵 <small>ち</small>	角 <small>かく</small>		嬰商 <small>えいしやう</small>		商 <small>しやう</small>		宮 <small>きゆう</small>	五音七声 (日本)
四寸二分三分二	四寸四分三分二	四寸十分八	五寸十分一	五寸十分四	五寸六分三分一	五寸九分三分二	六寸十分四	六寸十分八	七寸十分二	七寸五分三	八寸十分一	史記律書による竹管の長さ
四寸六分六厘	四寸八分八厘四毛八糸	五寸三分	五寸五分五厘一毛	六寸	六寸二分八厘	六寸五分八厘三毛四糸六忽	七寸一分	七寸四分三厘七毛三糸	八寸	八寸三分七厘六毛	九寸	律管を九寸とする実長

『五行大義 下』『雅楽鑑賞』の表を基に作成

中国の林鐘は日本の黄鐘にあたり、月は6月、十二支では未、律管の長さは6寸である。

表3 日没後の地御前以降に奏される楽曲

- ・地御前の沖山に見える辺りから「新楽乱声」<sup>しんがくらんじょう</sup> -唐楽（登場音楽）
- ・祭事の終わった後に「三台塩急」<sup>さんだいえんきゅう</sup> -唐楽・平調
- ・潮の差し上がってくるまでの間に「五常楽急」<sup>ごしょうらくきゅう</sup> -唐楽・平調
- ・御船を沖合に出して「陪艦」<sup>ばいろ</sup> -唐楽・平調、三匝
- ・地御前と宮島との中間で「鶏徳」<sup>けいとく</sup> -唐楽・平調、その後読経（月に対しての管絃。今はない）
- ・鳥居前に着船 管絃「越天楽」<sup>えてんらく</sup> -唐楽・平調（渡物として平調→盤渉調→黄鐘調に移調されている。）三匝
- ・大元神社前に着岸 管絃「老君子」<sup>らうくんし</sup> -唐楽・平調 三匝
- ・西松原地先（現清盛神社沖付近）「新楽乱声」<sup>しんがくらんじょう</sup>
- ・火焼前管絃2曲「早甘州」<sup>はやかんしゅう</sup> -唐楽・平調、「抜頭」<sup>ぼとう</sup> -唐楽・太食調
- ・客神社祓殿前 管絃「林歌」<sup>りんが</sup> -唐楽・平調、巖島独特の朗詠「催馬楽・伊勢の海」
- ・榊形（客神社祓殿と廻廊で囲まれたところ）管絃「合歡塩」<sup>がつかえん</sup> -唐楽・太食調、三匝

【巖島信仰事典】「管絃祭のすべて」より作成

『五行大義』「卷第四 第十五 律呂を論ず」に十二律のことが記されている。それには、「『春秋元命』では“律という言葉の意味は率、つまり導くということである。”と言っている。『続漢書』では“律とは術、つまり法則ということである。”と言っている。『律書』では“呂は序、つまり順を追って述べるということである。”と言っている。四季における陰陽の気について論じて、1年12ヶ月の順序を決める。陰陽はそれぞれ6つずつあるので、陰陽を合わせると12になる。陽の6つは律<sup>りつ</sup>と言われ、陰の6つは呂<sup>りょ</sup>と言われる。律の6種とは、黄鐘<sup>こうしゅう</sup>・太簇<sup>たいさう</sup>・姑洗<sup>こせん</sup>・蕤賓<sup>すいひん</sup>・夷則<sup>いそく</sup>・無射<sup>ぶえき</sup>である。呂の6種とは、林鐘<sup>りんしゅう</sup>・南呂<sup>なんりょ</sup>・応鐘<sup>おうしゅう</sup>・大呂<sup>たいりょ</sup>・夾鐘<sup>きょうしゅう</sup>・仲呂<sup>ちゅうりょ</sup>である。『史記』では“律曆とは天がすべてのもの、すべての季節の気を制御して、万物を成熟させるということである。”と言っている。『帝王世紀』には“黄帝は臣下の侖<sup>れん</sup>に、大夏の西、崑崙<sup>こんろん</sup>の北の解谷<sup>かいこく</sup>というところで竹を取らせた。そしてその竹の太さの均一のもの、2つの節の間を断って、これを吹かせて黄鐘の笛をつくり、その笛を吹くとその音色は鳳凰の鳴き声のようであった。また、音階は陰陽それぞれ6種類あったので、律呂とし、星宿を分類するためにも利用した。”と言っている。伶洲鳩は“律とは音階の基本を定めて、度量衡も定める源である。”と言っている。“そして3を基準にして六律・六呂を調べて十二律を形成する。これは天の道である。”<sup>32)</sup> 『淮南子』には“数は一から始まるが、一のみでは何も生ずることができない。そこで分かれて陰と陽とになる。陰陽が和合して万物を生ずる。だから一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ずるということになる。そして3ヶ月を一時（一季節）とする。また祭祀には3飯があり、喪には3踊があり、兵事には3令がある。このようにすべて3を基準にしている。3

は3倍して9となる。だから黄鐘の律は長さが9寸であって、5音の宮の音に相当する。そこでまた9を9倍して $9 \times 9 = 81$ で、黄鐘の数値が定まる。黄鐘の気は十二支の子にあって、北斗の柄は11月と同じ子の方向を指し、日月の会は星紀<sup>33)</sup>にあり、林鐘を下生する。林鐘の数値は54で、気は未にあり、北斗の柄は6月と同じ未の方向を指し日月の会は諏誓<sup>34)</sup>にあり、南呂を下生する……。〔林鐘とは、林は多いということであり、万物が成熟してその数が大変多いということである。〕<sup>35)</sup>〔『漢書』律曆志〕では、“三元とは天は施し、地は導き、人は仕えるという(3つの)道理である。… 6月は坤(季夏)の一番したの初六であり、陰気は太陽に任務を与えられ、継ぎ養い化み柔らげ、全てのものを成長させて、それを(十二支の)未に茂らせ、種を強く大きくさせる。だから林鐘を地元とし、律の長さは6寸、6は陰が陽の施しをうけるという理由で、これを天地のうちに立て、陰陽の気によって物体を存在させる。乾は天地の偉大なる万物のはじめを知り、坤は万物を作成する。”<sup>36)</sup>〔楽の和は天地間の和の気を受けたものであり、礼の節序は天地間の節度そのものである。和合作用があるゆえに、万物がみな化生し、節序あるがゆえに万事万物みな区別が生ずる。楽は天の道理によって作られ、礼は地の道理によって制定される。地の気は上昇し、天の気は下降し、陰陽の気は相摩擦し合い、天地の気は相動かし合う。(その結果)鼓動して雷霆となり、奮い起きて風雨となり、変動して春夏秋冬の四時となり、暖める光として日月となって、ここに百物が化生興起するのである。このような和合の理から考えれば、楽というものは天地の和合と同じものである。〕<sup>37)</sup>〔七正とは七星(日・月・木・火・土・金・水)で、その七星の運行する二十八舎(宿)は、日月の宿る所で、舎は気を昇らせるが、この二十八舎と、音律と曆数は、天が水・火・木・金・土の五行と八正(八方の風)の気を通變させて、万物を成長結熟させる根本となるのである。〕<sup>38)</sup>

以上のことから、星信仰と管絃には繋がりがあることが判る。楽(管絃)によって天地間の和の気を受けることにより、和合作用があり、万物がみな化生する。楽は天の道理によって作られるもので、陰と陽の和合は、五行を順当におこない季節をなめらかにし、そして世の中がうまくいく。管絃船は、神事を行う手前の沖で御供船によって3匝される。神話伝説である『古事記』において、天の御柱の周りをイザナギが左に、イザナミが右に廻り、出合った後、2神は交合し八州を生んでいる。管絃船の匝する行為は出合いを意味している。3は陰陽が和合し、万物を生みだす数字である。3匝されることにより、また自ら3匝することにより、陰と陽の和合を図る。七政による7という数字を重視した十七夜は、大潮でありほぼ満月の夜である。よって、旧暦十七夜月の大潮の夜に天と地が向かい合い、管絃を奏し、管絃船が三匝することにより陰陽は和合する。

## V. 終わりに

巖島神社は広島県廿日市市宮島町の海上に造営された珍しい神社である。巖島神社の起源は、推古元(593)年に遡るが、創建当時に社殿はなく、仁安3(1168)年に平清盛と巖島神社神主佐伯景弘

により現在における大規模な社殿となったとされる。

巖島神社は、巖島（宮島）西北の北東と南西から突き出た尾根の間の入江に鎮座している。その理由は島自体が神として崇められ信仰の対象となっていたことから、島の上に造営できなかったためとされる。そして巖島神社には、巖島の中心となる神の山と崇められてきた弥山を源流とする御手洗川と白糸川の両河川が流れ込んでいる。巖島神社本殿の裏の森を「後苑」といい、神聖な場所として人の出入りを禁じている。そこにある不明門は、神の通る門であって人は出入りしてはならず、開いてはならないとされていた。この構造は祭神が紅葉谷（御手洗川）を通路とし、弥山から本殿へ出現されるという信仰に裏付けられている。

巖島管絃祭は、旧暦6月17日に行われる。なぜこの日に行われるのか。平安時代当時は大型船を使用していたため、満月の頃の大潮は絶対条件であるが、7～9月は台風の時期であるため、それを避けて6月としたというのが定説となっている。しかし、管絃を風流な遊びとしてではなく、巖島の神を慰める神事として取り入れたことは、それ以上に重要な理由があつてのことと考え、古代中国より日本に導入された陰陽五行思想により考察した。

霊山弥山から巖島神社、対岸にある地御前神社は南北に並んでいる。そして巖島神社の本殿は乾に向いている。このことから、平安時代に流行した星信仰に関係があると考えた。

北極星と北斗七星は北に位置し、1年を通して見ることができるため、夜間に航行する船にとって、方向を知るための指針となる。北極星は北に不動の位置を占め、天の皇帝とされ神聖視された。北斗七星は季節によって位置を変え、その柄（剣先）は月や時刻を指し示す。その位置や柄の指す方向で季節や時刻を知ることができるため重視された星である。その基準とされたのは日没後であり、すなわち、日没後に北斗七星が、どの位置にあり、柄が何処を指すかで、季節（十二支）や時刻が判断できる。北斗七星が西北に来るのは旧暦5月、6月、7月である。その中で、北斗七星の柄が指し示す6月の未は、易（後天八卦）では坤であり、坤は純陰で地を表す。この時、対となる南斗六星は南西に来る。巖島神社本殿の後方、いわゆる南西には弥山を源流とする御手洗川の中継地である紅葉谷がある。紅葉谷を通り弥山の祖神は不明門から巖島神社本殿へと入る。さらに、巖島神社本殿の向く乾（西北）は易では純陽で天を表す。よって、旧暦の6月とは、1年に一度山の神である大山咋神と水の神である市杵島姫命が出合い、天と地が顔を合わせる月なのである。

では、その日に管絃を伴うのはなぜか。『史記』「楽書」には、楽の和は天地間の和の気を受けたものであり、和を合する作用があるため万物が生まれ、節序があるため四季における陰陽の気が1年12ヶ月の順序を決める。楽は天の道理によって作られるとしている。

17日は十七夜といわれ、ほぼ満月の日である。満月を目的とするなら十五夜でもよい。では、なぜ十七夜か。これは、7という数字を重視した七政によるものと思われる。前述したように、北斗七星は北極星を中心に一昼夜に廻転し、1年に位置を変えながらその向きを変える。北極星と北斗七星の柄は、季節を指し示す星である。北斗七星の柄、いわゆる7番目の星と北極星とを結ぶ角度は1ヶ月

に30度ずつ位置を変えていく。この角度によって1年十二支の方位が決まる。このことにより北斗七星は1年の気候を支配する星として神聖視されていた。このようなことから大潮のなかでも十七夜が選ばれた。

管絃祭では、神事を行う手前の沖合で管絃が奏され、管絃船は3匝（廻）する。3は道教思想において万物を生みだす数字である。道教の理念は、道はあらゆるものの根源である。道は「一」を生み、この「一」から、対立する2つのちから陰と陽が生まれた。陰と陽は、宇宙の三つの力である天、地、人の形をしている。この3つのものから、他のあらゆるものが生まれるとされる。『漢書』『律曆志』には、三元とは天の施し、地は導き、人は仕えるという3つの道理であると説いている。

神話伝説である『古事記』において、天の御柱の周りをイザナギが左に、イザナミが右に廻り、出会った後、2神は交合し八州を生んでいる。このことから、管絃船の匝する行為は出会いを意味していると考えられる。自然は天（陽）と地（陰）の交合によって万物を生み出す。それは、五穀豊穡を願うものである。

地御前一巖島間の渡御は、比叡神社の山王祭における琵琶湖への渡御に同じく山の幸、海の幸をもたらす神威を拝するものと思われる。

よって、山の神（陽）と水の神（陰）が出合い、天（陽）と地（陰）が楽（管絃）によって和合するのは、日没後に北斗七星が西北に、南斗六星が南東にくる6月以外にはない。

以上のことから旧暦6月17日に行われる巖島管絃祭は、陰陽五行思想を巧みに取り入れた、海の幸・山の幸への感謝と五穀豊穡を願う神事であることが明らかとなった。

注

- 1) 「略縁起『いつくしま由来』考一附・影印と翻刻一」『巖島研究：巻6』妹尾好信、広島大学世界遺産・巖島-内海の歴史と文化プロジェクト研究センター／編集、世界遺産・巖島-内海の歴史と文化プロジェクト研究センター、2010、45-47p  
『宮島町史 資料編・地誌紀行1』宮島町編集、宮島町、1992、142p
- 2) 「弥山の山岳信仰」『巖島信仰事典』松岡久人・藤井昭、2002、228-229p
- 3) 『宮島町史 資料編・地誌紀行1』宮島町編集、1992、宮島町  
〔地御前大明神〕  
「巖島の海の面を去事三十六町。佐伯郡の海濱に鎮座し給ふ。則地御前村と云。大宮御本社六座・客人宮五座・御神号巖島同前也。社頭造立ハ巖島同時にして、巖島を内宮と称し、此社を外宮と称す。地の方にまします御社なる故に地の御前と名づく。」『巖島志 海路名所附全』223p  
〔地御前本社〕  
「巖島の本社をさる事、海上三十六丁、佐伯郡の海濱に鎮座したまふ。即地御前村と云。社頭の造立は巖島と當村にして、巖島を内宮とし此社を外宮と称す。山陽道の地續にましますゆへ、地の御前となづく。又或説に、天照太神と吾勝速日尊を主とし奉る。是則地神第一、第二の太神なるゆへ、<sup>かみの</sup>神御前<sup>ごぜん</sup>よも申奉るとも云り。<sup>しんじ</sup>神叟に三種の神宝とてわたらせ給ふ。故有事や、神秘なれば其宝物を知らず。年中行事に祭用の事委しく記す。他に云、別宮御旅所にひとし。」『中国名所図会卷四』278p  
『巖島信仰事典』三浦正幸「巖島神社の本殿」2002、366p
- 4) 『巖島誌』重田定一、聚精堂、1910、142、143p
- 5) (神仏信仰事典シリーズ『巖島信仰事典』「管絃祭のすべて」、野坂元定、野坂元良／編、戎光祥出版、2002、104p
- 6) (神仏信仰事典シリーズ『巖島信仰事典』「管絃祭のすべて」、野坂元定、野坂元良／編、戎光祥出版、2002、105p
- 7) [http://www.miyajima.or.jp/event/event\\_kangen.html](http://www.miyajima.or.jp/event/event_kangen.html) 社団法人宮島観光協会 | 行事 | 管絃祭
- 8) 『神戸福原における安徳天皇新内裏の位置についての考察-陰陽五行思想からの分析-』2010、岡山大学社会文化科学研究科紀要  
『神戸福原における雪見御所(平清盛邸推定地)についての考察-風水思想からの分析-』2011、岡山大学社会文化科学研究科紀要
- 9) 新日本古典文学大系51『中世日記紀行集』「高倉院巖島御幸記」福田 秀一／〔ほか〕校注、岩波書店1990、16p、17p  
「かねてまいり設けたるよし申。御やうじの船しばらく待たるゝ。」16p  
「御所<sup>ひんがし</sup>の東の庭に白木の机を立てて、薦<sup>こも</sup>を敷きて、白栲<sup>しろたえ</sup>の幣<sup>へい</sup>を寄せたつ。その東に唐櫃<sup>からびつ</sup>の蓋を開

けて、金の幣<sup>こがね</sup>を置く。その西に藁座を敷きて御やうじ<sup>除、禰、師</sup>の座とす。」17p

治承4（1180）年2月21日に高倉上皇は東宮言仁親王（安徳天皇）に譲位し、その年の3月に厳島神社へ参詣している。『高倉院厳島御幸記』は、旅に同行した公家源通親によって書かれた紀行日記である。

- 10) 『安倍晴明と陰陽道』 山下克明、河出書房新社、2004、56p
- 11) 新釈漢文大系『史記 四（八書）』吉田賢抗訳、明治書院 1995、145p、146p
- 12) 『とはずがたり全釈』「百四十五 厳島の大法会に（乾元元年）」監修：中田祝夫、著者：呉竹同文会（水川喜夫、和田久、杭迫晴司、倉本光雄、落合尚郎）風間書房1966、622p  
「十三夜の月御殿の後の深山より出づる気色宝前の中より出給ふに似たり。御殿の下まで潮さし上りて、空に澄む月の影又水の底にも宿るかと思はる。」
- 13) 『厳島誌』 重田定一、聚精堂、1910、143p
- 14) 「乾卦純陽之象、生萬物者、莫過乎天。乾為生物之首。陽氣起子、乾是陽氣之本。故先子位、以純陽堅剛、故在西北、以配金。」（萬物を生ずるは、天より過ぐるは莫し。乾は物を生ずるの首為り。陽気は子より起り、乾は是れ陽気の本なり。故に子の位に先んじ、純陽の堅剛なるを以て、故に西北に在り、以て金に配す。）『五行大義 下』中村璋八通釈、明治書院、1998、74p
- 15) 「（6月には）未を指す。未とは味なり。」『淮南子』「卷三 天文訓」164p、166p  
「林鐘之数五十四、氣在未、六月建焉」（林鐘の数は54で、氣は未にあり、北斗の柄は6月の未を指す）『五行大義 下』中村璋八通釈、明治書院、1998、8-9p
- 16) 「坤居西南者、坤卦純陰之象。能養萬物、莫過於地也。陰體卑順、不敢當首。陰動於午、至未始著。故坤後午之位。地體積陰。坤醜純陰象地。」『五行大義 下』中村璋八通釈、明治書院、1998、73-75p
- 17) 「北斗居天之中、當崑崙之上。運轉所指、隨二十四氣、正十二辰、建十二月。又州國分野年命、莫不政之。故為七政。虞錄云、北斗七星、據璇璣玉衡、以齊七政。政者天子所治天下。故王者、承天行法。合誠圖云、北斗有七星、天子有七政。斗者居陰布陽、故稱北斗。其七星各有四名。合誠圖云、斗第一星名樞、二名璇、三名璣、四名權、五名衡、六名開陽、七名標光。」『五行大義 下』中村璋八通釈、明治書院、1998、51-52p
- 18) 現在のオリオン座
- 19) 新釈漢文大系『史記 四（八書）』吉田賢抗訳、明治書院 1995、145p
- 20) 『図説 安倍晴明と陰陽道』監修：山下克明 編：大塚活美河出書房新社、2004、62p
- 21) 『星の方言集 日本の星』野尻抱影著 中央公論社、1973、7p、29-30p
- 22) 『中国の星座の歴史』大崎正次、雄山閣出版、1989、2-3p
- 23) 「天は円く、地は四角く、道はその間にある。」『淮南子』「天文訓」160-161p
- 24) 『雅楽鑑賞』押田 良久、1969、文憲堂七星社、1p（序文 芝 祐秦識）



- 25) 『雅楽鑑賞』押田 良久、1969、文憲堂七星社、12p
- 26) 『雅楽事典』代表執筆 東儀信太郎、音楽之友社、1989、10p
- 27) 「古より今にいたるまで、習ひ伝へたるうたあり。これを神楽<sup>かぐら</sup>催馬楽<sup>さいばら</sup>風俗<sup>ふうぞく</sup>といふ。かぐらは天照おほん神の、天の岩戸をおし開かせたまひける代に始まり、催馬楽は、大蔵の省の国々の貢物おさめける民の口遊<sup>くちずさみ</sup>におこれり。是うちある事にはあらず。時の政よくもあしくもある事をなん。ほめそしりける。さいばらは、公わたくしのうのはしき遊楽のことのね琵琶の緒ふえの音につけて、わが国の調ともなせり。皆これ天地を動かし、荒ぶる神をなごめ、国をおさめ民をめぐむよたたとす。」『梁塵秘抄口伝集』卷一 後白河天皇
- 28) 『雅楽鑑賞』押田 良久、文憲堂七星社、1969、14p、19p
- 29) 『雅楽鑑賞』押田 良久、文憲堂七星社、1969、22p
- 30) 『雅楽鑑賞』押田 良久、文憲堂七星社、1969、28-31p
- 31) (神仏信仰事典シリーズ『巖島信仰事典』「管絃祭のすべて」、野坂元定、野坂元良／編、戎光祥出版、2002、102p
- 32) 『五行大義 下』中村璋八通釈、明治書院、1998、1-3p
- 33) 十二支の丑
- 34) 十二支の亥
- 35) 「林鐘者、林衆也。萬物成熟、種類衆多也。」『五行大義 下』中村璋八通釈、明治書院、1998、17p
- 36) 『五行大義 下』中村璋八通釈、明治書院、1998、7-9p
- 37) 『五行大義 下』23-25p
- 38) 「樂者天地之和也。禮者天地之序也。和故百物皆化。序故羣物皆別。樂由天作、禮以地制。」「地氣上躋し、天氣下降し、陰陽相摩し、天地相蕩。鼓之以雷霆、奮之以風雨、動之以四時、煖之以日月、而百物化興焉。如此則樂者天地之和也。」『史記 四 (八書)』「樂書第二」49-50p、53p
- 「書曰、七正。二十八舍。律曆、天所以通五行・八正之氣。天所以成熟萬物也。舍者、日月所舍。舍者、舒氣也。」『史記 四 (八書)』「律書 第三」104p